名張市史だより

NABARI HISTORY LETTER
No. 5
平成22年3月21日

●編集発行●
名張市総務部総務室市史編さん担当
〒518-0718　名張市丸之内54-8
☎0595-64-2249

名張の発掘史
―遺跡遺物の新発見で広がる研究―

市史編集専門委員会委員（考古）　水口昌也（市文化財調査員）

このたび、名張市史の考古編が発刊されることになりました。この機会に、名張市内で本格的に発掘調査が始まる昭和40年代後半までの名張市内における遺跡遺物の発見、発掘と研究を振り返ってみたいと思います。

◇　◇　◇

出土遺物の発見では、古くは平安末期頃に書かれた「覚禅抄」という書物に「伊賀国黒田杣」（現在の錦生地区）で大水による崖崩れで長さ90センチ前後の銅鐸が出土したことが記されていますが、現物は明らかではありません。ただ、伊賀地域出土と伝えられている銅鐸は、埼玉県立博物館所蔵品をはじめ数点知られていますが、いずれも錦生出土の確証はありません。これまで確認されている伊賀地域出土の銅鐸は、いずれも形式的に新しい突線鈕式銅鐸といわれるものであり、錦生出土の銅鐸も90センチ前後の大型であることからこの形式のものと考えられます。

古墳出土の遺物に対しては、人々は貴重なものといった認識もあったと考えられ、明治43年（1910）4月には、結馬の桶子谷古墳が発掘され、出土した遺物が陵墓に関係するものではないかとして届けましたが、当時の宮内省から東京帝室博物館に差し出すよう指示され、現在の東京国立博物館に保存されています。その後も、古墳や畑などから出土した遺物は、個人や公民館、神社などで保存されています。

そのような中で、これらの資料を用いて昭和36年（1961）には、宇佐晋一、森川桜男によって「伊賀における弥生式土器・土師器の集成」『伊賀郷土史研究四』が発表され、伊賀地域では初めて、形式編年と弥生文化受容の学術的な論考が登場しました。

◇　◇　◇

遺跡の発掘調査については、昭和21・22年（1946・47）に、旧上野市在住の村治円次郎が交流のあった京都大学の梅原末治を招聘し夏見廃寺を発掘調査しています。この成果について正式な発掘調査報告書は刊行されていませんが、村治円次郎の手記である「白鳳時代の寺夏見廃寺」『近畿文化』昭和32年（1957）や樋口隆康「戦後我が国における考古学の動向」『史林三三―二』昭和25年（1950）などで、金堂、塔跡の遺構配置や白鳳時代のせん仏が多数出土したことが紹介されています。

また、美旗古墳群は、昭和36年10月に殿塚古墳の北西部の近鉄線路の切り通し部分南側が地すべりを起こしたため、殿塚古墳の陪塚的位置にある、わき塚古墳（行政的には現伊賀市に位置する）の調査が近鉄から関西大学教授末永雅雄に依頼された。この機会に美旗古墳群の五基の前方後円墳の実測が行われ、詳細な墳丘規模や築造時期が「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究六六』昭和48年（1973）で検討されています。

◇　◇　◇

その後、昭和40年代になると青蓮寺ダムの完成とダムの配水による開発を目的とした国営パイロット事業が計画されたため、事業に先立ち埋蔵文化財の詳細分布調査が名張市全域を含む伊賀西部で行われました。『青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図』（昭和45年（1970）三重県教育委員会）この調査で初めて中世城館も調査対象として実施されています。

昭和50年代に入ると住宅地開発とほ場整備事業が急速に進められるようになり、事前の発掘調査が実施されるようになりました。これらの発掘成果は今回の市史の考古編に概要を収録していますのでご覧ください。

名張市史第1巻
「名張市史 資料編 考古」
発刊
4月7日(水)より販売開始
書籍版　5,000円
CD-ROM版　1,500円
※CD-ROM版は、PDFファイルを閲覧できるAdobe社Acrobatreaderなどがインストールされたパソコンが必要になります。
市内83遺跡を地域別に解説
巻末付録に「名張市遺跡一覧」
総ページ数225頁（書籍版はB5サイズ）
販売場所：総務室市史編さん担当事務所（名張市丸之内54-8 旧老人福祉センター／名張藤堂家邸跡隣／☎64-2249）
または、名張市役所2階総務室
※郵送希望の人は、総務室市史編さん担当へお問い合わせください。

地中から過去を知る

―発掘調査と市史考古編―

市史編集専門部会考古部会委員　門田　了三

このたび刊行される名張市史考古編は、大部分が発掘調査の成果を反映したものです。

名張市における体系的な発掘調査は、昭和51年（1976）10月からの前山遺跡群（現・百合が丘）の中村3号古墳の調査から始まりました。以後、経済の高度成長に伴って各種開発事業が盛んになり、発掘調査件数も増加の一途をたどりますが、平成に入る頃には開発も一段落し、史跡整備へと発掘調査の目的が移っていきます。

今回、考古編でご紹介する83遺跡のうち、名張市が発掘調査した遺跡数は43ヵ所、三重県が発掘調査した遺跡数は11ヵ所になります。

これらの調査成果が充分に反映した市史となり得たかは皆さんのご判断にゆだねるとしても、従来、不十分であった名張の古代史を理解する上では、資料になり得ると考えています。ただ、遺跡の内容の評価については、新しい手法や情報によって、さらに詳しくなったり変わったりする場合もあり、不変のものではありません。

◇　◇　◇

これまでの発掘調査から、従来の知見に新たな情報を加える発見として、中世城館の廃絶の時期があります。伊賀地域は有力な戦国大名が出現せず、村々に城館が築かれました。市内でその数は70を超え、地域の有力な土豪が他の地域の土豪に対し、互いに牽制し、また地域内の農民を監視する手段として、自らの屋敷地に堀を掘り土手を築きました。この城館の廃絶時期は、織田信長による伊賀侵攻（天正伊賀乱）というふうに考えられてきましたが、赤目町一ノ井所在の滝野氏城の調査により16世紀の前半には堀が埋められていたことが分かり、すべての城館が天正伊賀乱まで存続していたのではなく、小地域を超える土豪の再編成や周辺大名勢力への従属により、早々と武装を解除している城館があることが分かりました。

◇　◇　◇

最近の情報ネットワーク化や出土品に関する科学的分析により、出土品の解釈が大きく変わってきています。

今回の市史考古編には反映できませんでしたが、赤目町檀に所在する琴平山古墳の石室出土品、鉄製の冑、剣、直刀の武器セットについては、当初、古墳の造られた6世紀初頭から前半のもので、当時としては最新鋭の武器を持った被葬者、つまり大王直属の将軍の副葬品を想定していました。

しかし、保存処理に伴う分析と情報ネットワークによる全国の類例調査から6世紀後半のものと考えるのがよいのではないかという結論に達しました。武器セットは、大きな古墳を築いた名張郡首長の副葬品ではなく、40～50年後の二世代後の人物の副葬品であり、また、古墳自体も長い間利用されてきたことが分かりました。琴平山以後の名張郡の首長権は、地域間を移動しており、世襲ではありません。琴平山古墳の被葬者の子孫は、地域でどのような立場であったのか、今後の調査が楽しみです。

また、夏見の下川原遺跡で見つかった縄文時代の赤色顔料の朱は、水銀朱（硫化第二水銀）であることは当初から分かっていましたが、産地は、宇陀川をさかのぼった大和鉱山（宇陀市）か、名張川上流から櫛田川を経た伊勢丹生鉱山のいずれかだと想定していました。

水銀朱に混入する微量鉱物から産地を推定する方法から、より確実な水銀朱自体が持つイオウ同位対比を調べる方法が確立されてきました。その分析結果が、先日近畿大学理工学部よりもたらされました。イオウ同位対比マイナス9・53と伊勢丹生鉱山産でした。

約3400年前の人々の交流が新しい技術によって分かってきました。その成果は、今後もさまざまな場所でお伝えしていきます。

名張市内での発掘調査の一例

倭国大乱の跡か？丘陵上集落の堀跡
（弥生時代後期・塚原遺跡・蔵持町里）

古代名張郡夏見郷を治めていた夏身氏の館跡
（飛鳥～奈良時代・鴻之巣遺跡・鴻之台）